

震災後に風景を考える

港 千尋 (写真家・多摩美術大学美術学部情報デザイン学科教授)

Chihiro MINATO



1960年神奈川県生まれ。1984年早稲田大学政治経済学部政治学科卒業、ガセイ南米研修基金を受け、南米各国に長期滞在。1985年よりパリを拠点に写真家・文筆家として活動を開始。2002年オックスフォード大学ウォルフソン・カレッジ研究員。2007年第52回ベネチア・ビエンナーレ日本館コミッションナーに就任。写真展「市民の色 chromatic citizen」で第31回伊奈信男賞受賞、写真集に『波と耳飾り』『明日、広場で——ヨーロッパ1989～1994』など、著書に『ブラジル宣言』『記憶——「創造」と「想起」の力』(サントリ学芸賞)『ヴォイドへの旅 空虚の力の想像力について』など多数。

この2年ほど、わたしは「風景考」と題した展覧会のシリーズを企画してきた。東日本大震災から1年が経過した2012年に東京で1回目を開催し、その後、さまざまなアーティストの参加を得ながら継続している¹⁾。昨年は台北、今年はモンゴルで巡回展も行ったが、ここでは一連の試みを振り返りながら、アートが特定の地域や環境の変化をどのようにとらえ、それを表現に結びつけているの

か、その事例のひとつとして考えてみたい。

廃墟と時間

「風景考」の直接のきっかけは、住み慣れた土地が一瞬にして廃墟と化した大震災である。地震と津波が町や田畑を飲み込んでゆく光景は数か月間にわたりメディアに繰り返され、われわれの脳裏に焼きついたが、実際にそこで何が起きていたかが分かるようになったのは、その後である。現在もまだ行方不明者の捜索が続いている状況を思えば、全貌が明らかになるのはまだ先と言ったほうがよいかも知れない。

わたしはイメージをテーマにした研究と創作に携わる者として、一変してしまった風景と向き合わなければならないと考え、そのための芸術、自然科学、人文科学などの諸領域を横断するような表現と議論の場を持ちたいと思った。風景とは、まさに横断的な概念だからである。実際震災後2年半が経過し、多様な研究や論考が発表されている。特に復興事業を進めるうえで、景観は避けて通ることのできない大問題でもあり、震災前と震災後の景観にどのような関係を持たせるのかが多くの被災地で議論されている。

いっぽうわたしたちの企画は、一瞬で変わりうるといふ過酷な現実を経験したうえで、もう一度風景を歴史的にも、また表現の上でも考えなおしたいという気持ちから出発しているのだが、すでに出発点において、この「一瞬」が実に多くの意味をはらんでいる。廃墟は英語でruinだが、この言葉の語源には「崩れる」「倒れ

る」というような、急激な変化を意味する言葉が含まれている。日本語では「ご破算」の語感に近いかもしれないが、持続していた物事が一瞬停止し、別の状態になってしまうという意味だろう。震災直後の被災地で多くの人が感じたのは、流れていた時間の切断であった。

震災後の風景とは、その切断面に現れた何かである。それを総合的に理解するのは容易なことではないが、風景を空間的な概念としてとらえていただけでは見えてこないことは、明らかだろう。この場合の切断面とは、何よりもまず時間的な切断面のことだからである。時間の区切りを長いほうから取ってゆけば、まずその変化は地質学的なものである。それは日本列島の形成にまで遡る時間であり、このスケールでは人間の登場はごく最近のことに過ぎない。

その上に歴史的な時間が重なる。「千年に一度の歴史的震災」という表現は、文字記録として残っているという意味での歴史であり、神話的な伝承まで含めようと思えば、数千年というスケールになるだろう。さらにその上に東北の歴史があり、村や町の発達史があり、一族の来歴や家族の成り立ちがある。そしてこれらの異なる時間のスケールは層状に重なっているだけでなく、互いに影響しあいながら結びついている。どこかに地質学的な時間が流れ、別のどこかに家族の時間が流れているのではなく、これらがひとつとなってそこに存在しているという「状態」、それがひとつの「風景」なのである。その全体性が一瞬にして変化し、切断された状態を見せているのが廃墟ということになるだろう。

船は覚えている

日常的な時間のなかでは見えないような時間が、露呈する機会ということでもある。震災後から継続的に東北を訪れるなかで見えてきたのも、ある意味でそのような「時の露呈」だった。そのひとつは内陸にまで入り込んでいた漁船の姿である。茨城から福島、宮城にかけての海岸に近い国道地帯、「浜通り」と呼ばれるような地帯では、係留されていたボートや漁船が多く流されて、中には国道を超えて十キロ近く内陸にまで入っていた。波の力に慄くほかはなかったが、「船が陸に行く」という異常な光景が何を告げようとしているのかが分かり始めたのは、1年以上経過してからだった。

きっかけは南相馬市博物館を中心にして、美術家の岡部昌生さんと共同で行ってきたワークショップである。自然科学、民俗学、歴史学などさまざまな分野の研究者、学芸員そして市民の方々とともに、南相馬という土地を協働で知ろうという、ゆるやかな集まりのなかで、わたしたちはこの土地には石碑が非常に多いということに気が付いた。津波で洗われた海岸へ車が出るたびに、立派な石碑が目につく。神社やお寺の入り口にも必ずと言っていいほど石碑がある。そこに住んでいても日常的には誰も意識しないほどありふれたもので、何のために建てられているのかと尋ねたところで、答えがすぐに帰ってくるような性質のものではない。これらの石碑を、岡部さんはフロッタージュという、一種の拓本の技法で擦りとり、わたしは写真で記録してゆき、その内容を読み解いてみようとした。

風雪に耐え、苔むしてもなお立っている記念碑ではあるが、実際は多くが摩耗して全文を読むのは難しい場合のほうが多い。それでも内容をたどってゆくと、そこにはある種類



写真1 山の端まで至り、そこで止まっていた船

の石碑が多いことが見えてくる。そのひとつは、干拓事業が完遂したことを記念して、事業の内容を記録として残したものである。たいていの場合、碑の表には事業を敢行した代表者の名前があるが、興味深いのは裏側のほうで、そこには事業の内容が詳細に記述されている。それは工事の期間と延べ人数まで含めた、一種の収支決算報告であり、それが田畑のど真ん中に建てられているのである。

こうした干拓事業記念の碑を探しながら海岸に広がる地帯を観察してゆくと、津波によって洗われたと見えた土地の姿に、別の姿が重なって見えてくる。それはゆるやかにカーブする村の道が、実はかつての海岸線だったという事実であり、山の端からひろがる緑豊かな土地はかつての浦だったという古の風景である。日常的な感覚では想像することも難しいが、ある意味で、震災とは人間の想像力の限界を超えて時を遡る、破壊的な力の現れであったとも言える。

石碑の場所を元にして復元される海岸線には、津波によって押し流されてきた船が戻ってきていたからである。船は干拓事業の記念碑の横を通り過ぎて、山の端まで至り、そこで止まっていたものもある。泊まっていたと字を使うべきだろうか。船は、

人間が陸と思いこんでいた場所に、数世紀にわたる干拓の歴史の時間、その下にある海岸線形成の地質学的時間、さらには列島が形成されて以来の変化といった、複数の時間が流れていることを忘れていなかったことになる。

測定される風景

だがこのようなことは、日本全体で見ればそれほど異常な事態ではなかったともいえる。近世以降に地震や津波が起きたところでは、かつての海岸線が意識されるようなさまざまな現象が観察されたにちがいない。問題はそうした観察は一時的には話題になっても、数十年たてば忘れられてゆくということである。東北各地に残る過去の津波を記録した記念碑があらためて注目された所以でもあるが、これがきっかけとなって風景と時間の関係が再考されてゆくとよい。

だが今回の震災は、これとは別に過去には存在しなかったまったく別の種類の時間を導入する事故を引き起こした。福島第一原発の爆発と放射能汚染である。放射性物質の半減期には非常に大きな幅がある。事故の発生以来、わたしたちの毎日には数万年から数十万年という気の遠くなるような半減期の数字が、これも



写真 2 放射能で汚染された地域の町中には線量の計測値を表示するポストがある

また日常の時間の一部として現れることになった。

放射能汚染はまた、風景そのものに対して難しい問題を突きつけることになった。それが局所的に現れているのが、言うまでもなく福島である。地震と津波の甚大な被害で風景が一変した土地には、少しずつ人が戻ってきている。ところが地震も津波もさしたる影響を与えなかった内陸が高度に汚染され、現在も人気のない無人地帯となっている村がある。放射能の広範囲の拡散が、風景を眺める人間に、目には見えない次元をどうとらえるのかという問いを生んでいるのである。

写真表現は、この問題についてそれなりに豊かな経験を積んでいる。というのも、いわゆる環境汚染を引き起こす原因の多くが、人間の目には見えない物質の場合が多いからである。二酸化炭素も有機水銀も、それが自然環境のなかにどのような形で浸透してゆくのか、それ自体は目には見えない。人間が気づくのは、それがわたしたちの目に見えるような変化を引き起こした時である。見えないということが時間的な遅れにつながり、気づいた時点ではすでに取り返しのつかない、あるいは引き返しの不可能なレベルに達していることになる。

言い換えると、日常的な知覚の限

界そのものが、環境の破壊を大きくしているという事実である。誰の目にも見えるような変化が現れた時には、すでに深刻な汚染が拡大している。水俣病をはじめとして、20世紀の産業廃棄物による汚染の問題は、汚染のサイクルのほとんどが日常的な感覚では把握することのできないという点で共通している。この点で写真表現は、その限界を抱えながら、見えない次元をどのように語るかという問題と向き合ってきた。深刻な事態にいたるまでの、社会的なプロセスを観察することを通して、見えない次元を考えようとしてきたとも言えるだろう。

わたしは震災直後から飯館村と南相馬市を含む汚染地域を訪れるうちに、測定について興味をもった。放射線の測定が継続的に行われている地域での、日常である。線量の計測値を表示するポストが町中に現れ、小中学校の校庭の測定値が定期的に公表される。汚染地域では、いまや測定値は日常の一部をなしており、それがいつまで続くのか現時点で確実なことは何ひとつないと言っている。

「測定プロジェクト」として2012年から開始したリサーチは、今日の日本が「測定社会」と呼ばれてもおかしくないほど、わたしたちの日常生活がさまざまな測定によって影響を

受けている状況を対象にしている²。放射線の測定、放射能被曝によって発症する確率、今後地震が起きる可能性や活断層の位置など、震災によって引き起こされた事象について、珍しい種類の測定と確率計算が行われ、それが日常行動から政治的な決定にまで影響を及ぼしている。科学的な測定の方法論とは別に、測定そのものが人間の判断に大きな力を持ち始め、心理的な効果さえ与えているという現実を考えるプロジェクトである。放射線は見えないが、それを可視化する測定という行為を観察することによって、見えない次元がどのように作られているのかを想像することができるのではないだろうか。

モンゴルの風景のなかで

2013年9月モンゴルの首都ウランバートルで、「風景考inモンゴル」が開催された³。これまでの参加者に、新しくモンゴルのアーティストを加えて開かれた本格的な海外展である。展覧会に合わせて日本人作家数人とモンゴルへ行き、ワークショップやシンポジウムを開催した。モンゴルという日本とはさまざまな点で大きく異なる土地において、風景はどのような意味をもっているのだろうか。わたしたちにとっては未知の世界だったが、意外にも共通する問題意識があることも明らかになった。結論に代えて、2つの点について触れておきたい。

ひとつは、都市化による急激な変化である。遊牧生活が文化の基盤をなしているモンゴルでは、風景を読むことが直接、生きることに繋がっている。地図も標識もないような日常生活で、広大な草原のなかで生きるには、地形の特徴や天体の動きが読めなければ、道に迷ってしまう。風景を読む能力は子供の頃からの訓練の賜物であるとともに、神話や伝承のなかで伝えられ、またジャーマニ

ズムを含む古来の信仰のなかで脈々と培われてきた知恵でもある。

ところが社会主義時代に押し進められた定住化政策と、都市化政策によって、こうした能力を持たない世代が拡大している。持たないというよりも、もはや必要としない生活の比重が大きくなってきたのである。ソ連崩壊以降の自由化政策を通じて、総人口の半数近くが首都とその近辺に住まうという極端な集中化が起き、特に近年はグローバル資本による住宅の再開発や携帯電話の整備が進み、伝

統的な遊牧人口は半分にも満たないと言われている。都市に生まれ車で移動し、携帯電話とGPSで位置を確認する世代が国民の大多数を占めるようになる近い将来、モンゴルにおける風景の文化もまた変わらざるを得ないのではないだろうか。

ふたつめは、これに関連する地下資源の開発である。近年の好景気は、南ゴビ地方を中心にした資源開発によるところが大きい。だが地下資源の大規模な開発は、遊牧という循環型の経済とは基本的に真逆の、収奪型の経済を導入することになる。その結果、国民経済そのものが収奪型開発に依存することになり、循環型の国土は疲弊してしまう可能性がある。

モンゴルでの風景考に参加した作家のうち、ふたりの作品が期せずして、この問題を鋭く抉るものであった。どちらもユーモアと大らかさを合わせ持った魅力的な作品だが、地球の淵に腰かけた若い女性は、資源をストローで吸い尽くそうとしているように見えたり、一心不乱に大地を掘り起こそうとしているように見



写真3 モンゴルではグローバル資本による住宅の再開発が進む



写真4 ウランバートル市内のギャラリー Red Ger Gallery で開催された「風景考 in モンゴル」

える男には、頭部がなかったりと、どこかでバランスを欠いた現代の人間の姿が表現されているようにも思える。それは一般的に抱かれている、雄大な風景とは異なる、どこか不安な風景である。

わたしたちが生きて、この場所についての思考と感性を風景は表している。わたしたちはそれを「風景考」の方法論として、時と場所を変えながら、続けてゆきたいと考えている。

注

1 「風景考」は2012年2月から東京日本橋のkoyama satoshi galleryでスタートした。記録は一部、以下のサイトで見ることができる。

<http://tokyo.satoshikoyamagallery.com/>

2 「測定プロジェクト」は2012年会津若松と喜多方市で開かれた「会津漆の芸術祭」参加作品として展示された。今後はドイツ、フランスなどで順次発表される予定である。

3 「風景考 in モンゴル」はウランバートル市内のギャラリー Red Ger Gallery で2013年9月に開催された。